

H25. 7. 6

# あるがままを受け入れる



**長尾和宏** (ながお・かずひろ)  
 東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る、総合診療を目指す。医学博士。近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。55歳。

私は外来診察室で、中高年の女性に声をかけるときに「おかあさん」と呼ぶくせがあります。すると、「私はあなたのおかあさんではありません」「と真顔で怒った人が何人かいました。そこで「奥さん」に変えてみましたが、今度は看護師に「いやらしい」と不評で、これもやめました。

冗談はさておき、認知症の高齢者と介護者の関係は、介護者が家族であってもなくとも、だんだん母子関係に近づいていきます。自分の娘のことを「おかあさん」と呼ぶ場合をよく見ます。また、さんざんいじめ倒してきた「憎いお嫁さん」のことを「おかあちゃん」と呼んでいる高齢女性を何度も見てきました。呼ばれているのを見たこ

## 「憎い嫁」が「おかあちゃん」に…

とがあります。さらには男性職員を「おかあちゃん」と呼んだ人もいました。認知症の人は、最終的に自分を介護してくれる人を「母性」として受け止めていることがよく分かります。その母性とは「無条件で受け入れてくれる人」とか「あるがままを受け入れてくれる人」という意味になるかと思えます。

さて認知症ケアのポイント①口からは、以下の3つです。①口か

ことを早々にあきらめ、経管栄養や胃ろう栄養に置き換わることが多い。また、オムツをつけて介護の手間を省略している人も多い。施設では機械で特別な浴場に入れるか、プールのように広い大浴場に入れるかのどちらかに分かれてしましました。

その母親の顔が見えないと、不安で大声で泣きだします。母親は赤ちゃんに精神的安心を与えています。それと同じことが認知症の人の頭の中で起こるのです。認知症ケアの中でもよくあることなので

施設の職員を「おかあちゃん」と呼んでいるのを見たこ

先週、西宮市のNPO法人「ついで場さくらちゃん」が主催して、認知症患者と介護者計約30人が毎年恒例の2泊3日の北海道旅行に出かけました。私が診ている認知症で寝たきりの98歳の女性も娘さんと北海道を満喫して無事に帰ってきました。

Dr.



「認知症ケア」シリーズ⑩

ばれている当のお嫁さんは、戸惑い顔です。なぜ、そんなことが起こるのでしょうか？ 生まれたての赤ちゃんは、お乳を与えてくれるおかあさんを全面的に頼っています。

ら食べること②トイレで排泄（はせつ）持ちが落ち着くのが「個浴」すること③これまでどおりの風呂に入ることです。これらとも呼ばれています。

こうした普通の生活を保つケアを行えば、大声を出したり、激しい妄想に襲われたりする周辺症状は出にくくなります。すなわち、介護する側の心がけひとつで、認知症の人の全身状態、運命が大きく変わってくるのです。



**機械浴** 専用の機械と浴槽を利用した入浴方法。身体のみひが強く、立ったり座ったりが困難な人を対象に、専用の車いすに乗ったままや、ストレッチャーに寝たまままで入浴できるタイプなどがある。

ひようい